周辺性巨細胞肉芽腫（巨細胞性エプーリス）の1症例

柴田 貞彦・大屋 高德・竹中 一哉・藤岡 幸雄
武田 泰典*

Peripheral giant cell granuloma (giant cell epulis)

Sadahiko SHIBATA・Takanori OHYA・Kazuuya TAKENAKA
Yukio FUJIOKA・Yasunori TAKEDA*

Abstract: Peripheral giant cell granuloma (giant cell epulis) is a rare giant cell lesion in Japan. The purpose of the present paper is to report a case of peripheral giant cell granuloma that occurred in an 8-year-old boy whose chief complaint was swelling of the gingiva of maxillary left molar oral region. The lesion was a sessile nodule covered by normal mucosa. There was no abnormal finding of underlying bone and laboratory examinations were in normal rates. Histologically the lesion consisted of granulation tissue containing numerous multinucleated giant cells. These cells were more prominent in the central area of the lesion. No resorption of the underlying alveolar bone was seen at the surgical resection of the lesion. Postoperative course was uneventful.

Key words: giant cell epulis (巨細胞性エプーリス), giant cell lesion (巨細胞性病変)

緒 言 症 例

顎顔面領域に発生する巨細胞性病変には、巨細胞腫、巨細胞肉芽腫、褐色腫、ケルビズムがある。これらのうち、真の腫瘍である巨細胞腫と修復性の病変である巨細胞肉芽腫とは1953年、Jaffe により区別された¹⁾。巨細胞肉芽腫には顎骨内に発生する中心性のものと、歯肉部に生ずる周辺性のもの、すなわち巨細胞性エプーリスとがあり、いずれにしても、本邦ではまれな疾患とされており、特に後者の例の報告は少ない^{2,3,4)}。今回、われわれは上顎小白歯部に発生した周辺性巨細胞肉芽腫の1例を経験したので、その概要について報告する。

患 者：8歳 男児。
初 診：昭和62年4月■日。
主 訴：左側上顎小白歯相当部の歯肉の腫脹。
既往歴：特記事項なし。
家族歴：特記事項なし。
現病歴：以前より、左側上顎小白歯相当部の歯肉の腫瘤に気づいていたが疼痛がないために放置していた。初診の1週間前に歯科検診で同部の腫瘤を指摘され、当科を紹介され来院した。

現 症

全身所見：特に異常なし。
口腔外所見：特記事項なし。

口腔内所見：|Cと|6間の左側上顎小白歯相当部の歯肉頂部を中心に、粘膜色で表面平滑な大きさ20×15mmの半球状の境界明瞭な腫瘤を認めた（写真1）。腫瘤は弾性軟で圧痛はなく、波動も触知しなかった。|Cは動揺を認めるものの、|6にはとくに異常はみられなかった。なお、|DEはいつごろ抜歯されたか明確ではなかった。

X線所見：腫瘤部下の歯槽骨には異常な所見はみられなかった（写真2）。

臨床検査：血清カルシウム、血清磷、アルカリフォス

岩手医科大学歯学部口腔外科学第1講座
(主任：藤岡幸雄教授)

* 岩手医科大学歯学部口腔病理学講座
(主任：鈴木鍾美教授)

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Iwate Medical University
(Chief: Prof. Yukio Fujioka)

* Department of Oral Pathology School of Dentistry, Iwate Medical University
(Chief: Prof. Atsumi Suzuki)

受付日：平成2年3月8日

写真 1 初診時の口腔内

写真 2 初診時の咬合法X線写真像

写真 3 病理組織像（弱拡大）

写真 4 病理組織像（強拡大）

ファッターゼをはじめとした諸検査値に異常は認められなかった。

臨床診断：エプーリスの疑い。

処置ならびに経過：昭和62年4月■日に生検を行ったところ、巨細胞性病変の診断を得た。同年6月4日局麻下に腫瘍の切除を施行した。なお、切除時に下方の骨には著変はみられなかった。しかし、術後46日目に萌出てきた15の近心の歯肉部に、再び大きさ10×10mmの粘膜色、半球状の腫脹がみられたので再切除した。以後、約2年を経過する現在、経過良好である。

病理組織所見：粘膜下に多数の多核巨細胞を混じた肉芽組織の増生がみられた（写真3, 4）。多核巨細胞間には毛細血管や線維芽細胞が種々の程度にみられたが、病巣中央部では多核巨細胞の密度は非常に高く、病巣の周辺にいくに従って多核巨細胞の数が次第に減少していた。また、一部には骨組織の形成もみられた。

病理組織学的診断：周辺性巨細胞肉芽腫（巨細胞性エプーリス）。

考 察

顎顔面領域に発生する巨細胞性病変には、巨細胞腫、巨細胞肉芽腫、褐色腫、ケルビズムがある。本症例では、臨床検査において血清カルシウム、血清磷、アルカリフォスファターゼは異常値を示さず、副甲状腺機能亢進症に併発する褐色腫の可能性は否定された。一方、顔面の変形もみられず、家族にも同様の疾患を有するものではなく、ケルビズムについても否定された。以上のことから、巨細胞腫あるいは巨細胞肉芽腫が考えられた。これら両者の相違点には腫瘍様所見の有無、巨細胞の数や大きさおよびその分布状態、類骨組織形成の有無などがあげられる^{5,6)}。また好発年齢は、巨細胞肉芽腫は20歳以下、巨細胞腫は20～30歳代とされている⁷⁾。本症例で

表 1 巨細胞腫と巨細胞肉芽腫の比較および自験例

	巨細胞腫	巨細胞性エプーリス	自 験 例
巨細胞	大型で核は周囲の細胞の核に類似	比較的小型で、周囲の細胞の核に類似していない	大型で周囲の細胞の核と類似のものを多く認めた。
巨細胞の分布	腫瘍全体に均一に分布	数も少なく、分布も不均一	不均一に分布
巨細胞による貪食	きわめてまれ	ヘモジデリンや赤血球の貪食をしばしば認める。	ヘモジデリンの貪食を認めた。
線維化	起こらない。	しばしば	病巣周辺部で巨細胞の減少と線維化を認めた。
骨形成	まれ	しばしば	認められた。
好発年齢	20歳以上	20歳以下	8 歳
X線所見	腫瘍の増殖とともに骨吸収を認める。	骨吸収は認められない。	骨吸収を認めなかった。

は、病巣中心部に大型の多核巨細胞を多数認めたが、病巣周辺部では巨細胞が次第に減少するとともに線維成分が増加し、一部に骨組織の形成がみられたことや、患者が若年者であること、また、腫瘍部の顎骨には骨の吸収像が認められなかったことより、巨細胞肉芽腫（巨細胞性エプーリス）と診断した（表1）。欧米とは異なり、本疾患の発生は本邦ではまれであり、したがってエプーリスにおける巨細胞型の占める割合も著しく低い⁷⁾。また原因としては外傷性因子、抜歯、乳歯の脱落、歯石や義歯不適合などがあげられているが、特に抜歯による外傷を重要視しているものもあり^{8,9)}、本症例でも以前にIDE部の抜歯が行われていたが、これが誘因となったか否かを知ることはできなかった。本疾患の処置としてThomaは歯牙および歯槽骨を含めた完全な外科的切除が適当であるとしている¹⁰⁾。本例においては術後まもなく再発をきたしており、切除時には周囲組織も含めて十分に搔爬することが重要と思われた。

結 語

本邦ではまれな疾患である周辺性巨細胞肉芽腫（巨細胞エプーリス）の1症例を経験したのでその概要について報告した。

引 用 文 献

- 1) Jaffe, H.L.: Giant-cell reparative granuloma, traumatic bone cyst, and fibrous (fibro-osseous) dysplasia of jaw bones. *Oral Surg* 6: 159-175, 1953.
- 2) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理Ⅱ. 永末書店, 京都, 1969, 740-765頁.
- 3) 千葉武広: エプーリス37症例の臨床病理学的観察. *日口外誌* 5: 236 1959.
- 4) 藤岡幸雄, 平井茂喜: 歯肉腫の各型に就いて. *口科誌* 4: 344-351 1955.
- 5) 好士和夫: エプーリス（歯肉腫）の臨床的ならびに組織学的研究. *口病誌* 26:1666-1682 1959.
- 6) Shklar, G.: Giant-cell tumor of the mandible and maxilla. *Oral Surg* 14: 809-827 1961.
- 7) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理Ⅱ. 改定版, 永末書店, 京都, 1982, 563-570頁.
- 8) Cooke, B.E.D.: The giant cell epulis: Histogenesis and natural history. *Brit D J* 93: 13-16 1952.
- 9) Bhaskar, S.N., Cutright, D.E., et al.: Giant cell reparative granuloma(peripheral): report of 50 cases. *J Oral Surg* 29: 110-116 1971.
- 10) Thoma, K.H.: *Oral Surgery*. 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 1969, p 942-944.